

浄土

1985-2

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受部雜誌) 第三二五号
昭和六十年一月二十五日印刷 昭和六十年二月一日発行
第五十一卷 二月号



二月の秀句

早春や庭をめぐりて門を出でず

高浜 虚子

春寒く水田の上の根なし雲

河東碧梧桐

勇気こそ地の塩なれや梅真白

中村草田男



二月号



我れ無量寿仏の光明威神の巍巍殊
妙なるを説くこと、昼夜一劫す
も、なお未だ尽すことあたわじ。

——『無量寿経』光明敷徳章

目次

法 話

涅槃会随想……………八 木 季 生…………(2)

いのちを見つめる……………平 野 仁 司…………(7)

——涅槃会に寄せて——

浄土宗のハワイ開教(続)……………新 保 義 道 ……(17)

《世相評談》

内の目、外の目……………丹 羽 演 誠…………(12)

——はみだした重度者——

寄 稿

大伴旅人讃酒歌の真意

——万葉集歌疑義——……………河 野 喜 雄…………(23)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第8回……………寺 内 大 吉…………(35)

前章・絶唱の経典 (八)

挿絵 松澤 達文

浄土句集……………一 田 牛 猷 選…………(32)

表紙 小林治郎画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

涅槃会随想



やぎしょう
八木季生

(大正大学講師)

日本の国の気候の中では、二月が一番寒い。寒くて雪の多いせいにか、二月は一般的に行事が少ないのだが、その行事の少ない二月に行なわれる大切な仏教行事に涅槃会がある。

昔から私の寺では二月十五日の夕刻に、涅槃像の前で暫時の別時念仏を修することを慣例としていたので、かなり小さい頃から火の気のない寒い本堂に夕食後に行って、念仏を唱えたことを覚えている。これは寒い所で念仏をした寒さが身にこたえた為と、念仏の終わった後で、お供物のお菓子を食べられたので、子供心に強い印象となって今でも記憶に残っているのだと思われる。

その当時は、涅槃とはどういう意味であるか知る由もなかったが、涅槃像を見ると、お釈迦さまは亡くなったというのに、仰向けにならずに横を向いて寝ているから寝半（ねはん）と言うのかと真剣にそう思っていた。

子供頃の印象に残る涅槃像は、戦災によって本堂もろとも灰になってしまった。その為に戦後は二月十五日になると仏前にお供物を供えて、往昔の釈尊の入涅槃の情景をしるびつつ念仏を唱えて追恩を申し上げていた。

本堂が再建されてからは、涅槃会を迎える度ごとに涅槃像が欲しいと思うこと切なるものがあつたが、時代の移り変つた昨今では、昔のような涅槃像を手に入れることはとても不可能なものと諦めていた。

去る昭和四十四年に、山崎辨栄上人の五十回忌法要が京都の金戒光明寺で行なわれた時のことである。会場に辨栄上人の画かれた大涅槃絵図が出品されていた。かねてから辨栄上人の画かれた涅槃図のあることは聞いていたが、実物を見たのはこの時が初めてであつた。聞きしにまさるあまりの素晴らしさに感嘆のほかはなかつた。

この涅槃図は、辨栄上人が明治三十七年に印度の仏跡を参拝された前後に画かれたといわれているもので、涅槃経の文字三万数千字の經典の文字が画かれた縦一丈二尺、横九尺の大きなものである。辨栄上人は各地を歩いての伝道中に、六つの部分に分けてこれを画かれた。従つて張り合わせの部分では線がずれている。遠くからこれを見ると線で画かれたように見えるが、そばに寄つてよく見ると字で画かれているのだから、初めて見た人は大抵びっくりする。

関東の大震災のあつた大正十二年当時は、東京の下町のお方がこの涅槃図を持っていて、どうしてもこれだけは火災から護りたいと、必死になつて持つて逃げたのださうである。多くの人の逃げまどう大火の中を、長い大きな物を持つて逃げることはさぞかし大変なことであつたと思われるが、不思議なことに自然と道が開けて、無事に持ち出すことが出来

たと聞いている。

この涅槃図を見た時に私の頭に閃いたことは、この涅槃図ならば墨で画かれた物だから、現代の技術を以てすればきつと復刊が可能であろうということであった。現在では各種の美術品がたとえ彩色された物であっても原物そのままに復刻されて出回っているが、その当時はまだそこまでいっていなかった。今は故人となった横浜にいた田中英八氏に復刻の希望を語ったところ、私もそれを考えたことがある、しかし百万円かかと聞いて諦めた、ということである。復刻に百万円ということは、その表装までを考えると最低でも百万円はかかる。今から十五年前の百五十万円は、かなりの大金である。私も残念ながら諦めざるを得なかった。

しかし涅槃図に対する私の執念というのか、是非とも欲しいという願望をなにかの機会にももらしていたに相違ないのだが、檀家のある篤信のご婦人が、ご住職がそんなに涅槃図を希望されるなら、私がお手伝い致しようとして申し出てくれた。大変ありがたいことであるが、あまりに一人のお方に負担を掛けては申し訳ないので、一つ百万のもので十作れば十分の一ですむ。いずれ印刷にすることだから、数多く作ればそれだけ安くなるわけだから、何人から有縁のお方に手紙を出して、辨榮上人の涅槃図と一緒に復刻しませんかと呼びかけた。しかし、既に出来ている品物の購入を勧誘するのですら苦勞するの、これから作ろうとする品物、それも表装まですると五、六十万円するであろう品物を一緒に作りませんかと言って呼び掛けても、そう簡単に応じてくれるものではない。あちらこちらと手紙を書いたり、電話を掛けたりして十人まとめる迄にはかなり苦勞をした。

この涅槃図は、ふだんは芦屋の光明会聖堂に保管されている。光明会聖堂の代表役員で

ある杉田善孝師とは、以前からご昵懇にしていたので、涅槃図製作の同志を募る傍ら復刻方法に関する具体的な相談を進めておいて、製作可能な情勢を見極めて作製をお願いをした。この仕事は京都のある美術専門の印刷会社に依頼し、細かい部分に分けて写真を書いて版を起こし、和紙に印刷するという方法をとった。写真に撮って印刷する迄の段階でかなりの時間を要したので、京都の表具屋さんに表装をしてもらって、品物が手元に届いたのは昭和四十九年九月であったから、涅槃図に初対面してから五年の歳月を要したわけである。

この涅槃絵図は、最終的には三十部印刷された筈で、全国各地の有縁のお方のところに納まっている。その中の一つが、桐生の篤信の念仏者石田義信氏の発願により、同氏に関係のある方々の協力もあって、東京芝の増上寺の三階道場に納められ、常時参詣のお方の目にふれている。私の寺では二月の始めに本堂に出し、三月のお彼岸まで出して、法要のあとには釈尊の入涅槃にまつわるお話しをするようにしている。最後に涅槃図のことについて「皆さんが今見ているその位置からは、線で画かれていると思うでしょうが、後でそばに寄ってよく見て御覧なさい。線ではなくて字で画かれているのですよ」と言うと、文字で画かれた絵に驚嘆する。それらの人の頭の中に、釈尊の入涅槃の情景が強い印象となつて残るに相違ない。これは辨栄上人の衆生済度の一方便であり、多くの人に仏縁を結ばせる為の慈悲心の表われであらう。

前にも述べたごとくにこの涅槃図は、辨栄上人の釈尊追慕の熱情の表われであり、どれ程の時間を要したか定かでないが、伝道の合間をさいて、涅槃経の文字を絵にするという超人的な御苦勞の結晶である。絵とはいえ、これはひとつの写経であるが、嘗てこの涅槃

図を、芝の増上寺で写経の指導をしておられる吉田修造氏に私の寺に來られた時にお目にかけたことがある。吉田氏の言われるのに、写経は墨継ぎを見せないようにするのに苦労するのだそうである。墨を筆に含ませたそのまゝの状態で書き始め、墨のきれる間際まで書き続けると、始まりと終わりとでは墨の濃さがかなり違う筈である。普通の書ではこの濃淡やどこで墨継ぎをしたかということも技術のうちになるが、写経ではそれを避ける為に、一度筆に含ませた墨を紙などに吸い込ませ、墨量を一定にするという配慮をするようである。従って一度の墨継ぎによって書ける字の数は、普通の場合に比べるとかなり少なくなる。必然的に墨継ぎの回数もふえ、それだけ時間もかかる。少ない文字ならともかく、三万を越す文字を書くのにどういう技術をとられたのだろうかと言をかしげられる。写経に永年苦勞されているだけに、未経験の私などに分からぬ苦勞が感じられるのであらう。

このようなわけで、私の寺が戦災で丸焼けになってから三十年たって、やっと涅槃圖をかけて涅槃會を迎えることができるようになり、今年もそれをお掛けする日が近くなってきた。前に述べた篤信の老婦人の呼び掛けがなかったら、恐らく今でもお涅槃像をお掛けして多くの人が敬尊入涅槃の情景をしるのび、追恩申し上げることも仏縁を結ぶことも不可能だったと思われる。そう思う時にひと一人の志たるやまことに大なるものがあると痛感する。この老婦人は今年は満九十一歳をむかえる。今もかくしやくとして毎月六日になるとお寺の定例の別時念仏會に出席される。毎年のことながら二月六日にはこの涅槃圖の前で手を合わせ、目に浮かぶ涙をそっとぬぐわれる。その思いは他人の知る由もないが、大聖釈尊の御徳を偲ぶとともにこれを画かれた辨榮上人の御苦勞を思い、ご自分の生涯の思い出に残る追恩を果たされたことに感謝されているのだと思われる。

(法)

(話)

いのちを見つめる——涅槃会に寄せて——

平野 仁司

(大本山光明寺教務部長
座間市宗仲寺住職)

冬將軍の到来で、今年もまた厳しくも白い季節となりました。

如月は、広漠と広がる銀一色の白さが冬枯れの木立と同様に物いね淋しさを呈し、一年のどの季節にも増して生と死の意識が強烈になるのを覚えます。

夜半にうなる寒風のざわめきは、一夜明ければひっそりと鳴りをひそめ、あの物狂わしさが厳かな静寂に変わるといふ大自然の織りなす「動」と「静」に不可思議な生命の息づきすら感じます。

どこまでも続く冬景色に対応するものは数少なく、寒椿や黄水仙の赤や黄色に眠っていた生命の鼓動が脈打つのを覚えます。枯渇の中にもみずみずしい躍動はあるものです。二月は、生と死の響宴であるかのように周囲には、いくつものサンプルが横たわっています。枯木は骨ばった輪郭だけを残し、往時の面影はありません。一陣の風に寒々と揺れる光景は人間の哀れな末路さえ思わせるのです。目をそむけたくても、この寒冷の季節には、生と死が隣り合った組みあわせが悲哀を顕わに

しているのです。

しかし、現実をよく見つめようとすれば、そこから自分なりの哲学も生まれて来ることです。何気なく折重なつたように見える落葉も、時には望ましい人の一生のあり方を導いてくれる対象ともなるのです。暑い盛り、緑蔭で憩いを場を提供してくれた青葉であり、みりの秋を彩る紅葉であったあの落葉は、春に先がけて今ではすっかり地に帰る「落花帰根」の準備が終わっています。落葉したばかりの頃と違って、しつとりと大地になじみ、激しい風にも、再び舞い上がることもなく地面の一部にさえなっていく落葉に、万象の流転と凋落が意識されます。

私たちは常に、逆境を恐れ、試練めいたことを避けようとしています。連なる観光バスの四号車はないし、病院の四号室は欠番になつていくことが多いのです。反面、華やかな現実のみ、よく見つめ迎合したりもします。けれども、幾多の試練に立ち向かう勇氣を持

たなければ、充実した生命を推し進めたり、終局を美しい大地の一部に帰すことは出来ないと考えなければなりません。

躍動の日々にこそ、あるべき生命の終焉を意識し、その含蓄で出発し直す時、生は単なる生ではなくなるのです。生と死の接点。つまり苦しさの体験を味わって初めて真に生きることがわかるのです。

現代っ子は、知識偏重の「もやしっ子」とよく言われています。心身共に軟弱で理屈っぽいのが特徴のようです。我が家でも、甘えん坊の小学四年生の次男が、生きる為に必要な心の紋様を自覚しなければならぬ出来事がありました。

昨年の師走、第二土曜日のことです。この二十年来、十二月の土曜日の午後、歳末助け合い運動のお手伝いとして、托鉢による街頭募金を近くの小田急線の駅頭でさせていた

だいてまいりました。その前日、「お父さん、明日は托鉢をするの」と彼がたずねたのです。「そう、あしたの午後にね」と答えると、「僕もお父さんと一緒にやってみないな」と言ったのです。いつになく大変まじめな顔だったので、親子であることを約束しました。けれど、本当は翌日になってみないとわからなくても、彼が自分から言い出したことに私はただ驚いていたのです。

その日、彼は帰宅するなり、一目散に奥へかけ込み、しばらくして僧衣の姿で私の前へ現われ出たのです。墨染めの装束に網代笠までかぶった立派な姿でした。その笠は、以前に高一の長男が修学旅行で永平寺から買って帰ったものでした。弟のためにと兄がわざわざ買ったものを、その日にかぶって見せたのです。「これは本気でやるんだな」と、いじらしさとおかしさがこみ上げる複雑な気持で彼の姿を眺めたのでした。

相武台前駅に着くと、私のそばにいる彼の

姿が珍らしいのか一斉に人々の視線が、その小僧姿に集まるのがわかりました。そのためか、あれほど意気揚々としていた彼は、すっかり上気してしまっている様子で別人のようにかしこまって、「ご協力お願いします。歳末助け合い……」と蚊の鳴くような小さな声で言うのがやつとのようでした。私は、しばらくの間、成りゆきを見守って自分なりにマイクで呼びかけを行っていました。

ところが始めて五分後に、彼の級友がお母さんと連れだって応援に来てくれたのです。「啓ちゃん、がんばってね」「啓司くん、ご苦労さんね」といわれたその親子の励ましと、さし出された浄財によって、少々照れながらも、本当に嬉しそうです。午前中、学校で自分の午後の行動を級友に話したようでした。

これを機に、手に十円、二十円と握った子どもたちや、みち行く大人の方々が募金に協力してくれ出したのです。彼の態度とその声

は、次第に変化してゆくのがわかりました。「ありがとうございます」と元氣よく言えてきたのです。そのうちに、拙寺の総代や知人が彼の行動を聞きつけて応援にかけつけて下さったのでした。

こうした勝縁に恵まれて、本人の呼びかけには更に力が入り、呼びかけては次々と頭を下げる姿は、それまでの彼ではなくなっていました。親から貰う小遣いと違って、街頭で自分をさらけ出していただくお金は、どんなに苦痛であり、また、ありがたかったことかと思えます。彼は数時間に及ぶ駅頭募金の終りまで立ち尽くしたのです。兄も学校帰りに立ち寄り、弟の方へ百円玉を入れているのがとてもほほえましく思いました。あとで兄は、「啓司は、よく駅に立ったなあ」と、その勇氣と行動にすっかり感心していました。私は私なりに、親子で行った助け合い運動に、いくつもの感慨を覚えました。正装をした人が意外と早足で通りすぎる場面も多くあ

る中で、子どもを何人も連れたお母さんが、ひび割れた手で入れて下さったお金のことなどが特に印象に残ります。そして、世の中のことをよく知らない次男が、その日の体験を大切にしながら、「利他行」の心を、少しずつでも養ってくれることを祈念したものでした。

一九八五年は、昨年暮に一五八万件（警察庁発表）という戦後で三番目に悪い事件々数の悲しい記録をつくって出発したのです。年々、手に汗する労働なくして大金を獲得しようという悪弊があとを断ちません。冷徹なこの二月の期に、一たび寒風の中にただずみ、身も心も無に帰すほどの苦しみを経ることも己れの修練として必要なことでしょう。

涅槃会（二月十五日）が巡ってまいりました。お釈迦さまの静かなご入滅が二月であられたということに、生と死についての厳かな観念

が現実のものとなってくるのです。お釈迦さまは、来るべき死のために生を充分生きられました。涅槃会は時代を超え、偉大な先徳の死を静かに偲ぶと共に、生のあり方について心ゆくまで思索する契機になれば誠に意義深いことです。

お釈迦さまが正覚された人間の有限性、つまり、いのちもあるものの、はかなさを代表する生老病死の問題は、この世の終末である自分の死をどう意味のあるものにするかに尽きるように思います。三十代半ばで、すでに生死を越えた解脱が得られたことに、涅槃会がより深遠なものとなって来るのです。

宇宙の無限の時間帯の流れの中で、私たちのちは幾ばくも存在しません。生きたくても、いつまでも生きられない尊い、生かされるいのちであることをもう一度思い起してみましよう。

先日、生と死の隣り合せに生きなければならぬ人々についての記事が目にとまりました。

した。臓器を提供する人と、提供される方の生死のことでした。又、山の遭難、飛行機事故などで常に生死が分かれます。昨年の暮、拙寺の檀家のN家でも、一族集っての楽しい餅つきの終了直後、その家の主人（六十八歳）がつきたての「からみ餅」を食べて喉につまって亡くなりました。正に一瞬の出来事だったのです。生かされるいのちが、これほどまでに鮮明になることはありません。

生かされるありがたさを考える時、毎日を無謀な日々にはしてはならないのです。いつかやって来る清らかで、いさぎよい人生の終局の日に備えて生と死の哲学をうち立てて置かなければなりません。心の準備は、元気で生きていく間に整えておくことが肝要です。二月という静寂な月こそ、自己を確かめる絶好な機会でもあるのです。苦しさを求めて行く姿勢に春の薄日は蘇ってくるものと信じてやみません。人の本当の幸せは、「苦中楽」にあるのです。

《世相評談》

内の目、外の目

—はみだした重度者—



丹羽演誠 にわ えん じょう

(大分県佐賀関町正念寺住職)

たが、しみじみと心に感じます。

世の中は、常に動いているために、種々の問題が起っています。そして悲喜こもごもの世相を展開しています。法然上人は、「念仏の申される様に生活しなさい」と申されまし

×

×

×

一月七日の地方新聞に「重度者を締め出す」の題にて次の記事がありました。福祉施設を経営している者として一筆走らせることにいたしました。ここに云う重度者とは、精神薄弱者の重度者のことで、精神病者と間違しやすいのでその点お含み下さい。

——精薄者通所授産施設というのは、自立する気さえあれば、だれでも入れるものと考えていたら、これは大変な認識不足だったようだ。

なぜかという、通所の授産所は、自治のための職業訓練施設で、県の判定で「重度者」とみなされたものは通所できないからである。

軽度の人たちに職業の訓練をすることは大したこと、そのこと自体に異論はない。ただ気になるのは、切り捨てられた重度者の人たちだ。

体のハンディを理由に通所の門から締め出し、あとは勝手にしろということでは、果し

て福祉の底上げは出来るのか、その点が気になる。

何事によらず、重度者が後回しにされている福祉の現状を考えると、このような重度者をお荷物扱いするやり方は本末転倒ではないか。

新春早々、こんな話を取り上げたのは、今年四月〇〇市に開園する精薄者通所授産施設で、四人が締め出しを食うことになったからだ。

形のうえでは、四人とも通所辞退ということになっているが、これらは県の判定を受ければ、ハネられることを見越したためである。

〇〇市に開園する授産施設は、三月末で閉鎖する民間のS園に代わるものとして県南の人たちが金を出し、国に法人化を働きかけ、やっと実現にこぎつけたものだ。

定員は二十五人で、S園に通っていた四人を含めて十七人の通所が決ったが、代わりに

四人の重度者は締め出しを食うハメになってしまった。

四人は重度施設に入るにしても、県南二カ所の施設は満員というから、当分は在宅生活を強いられることになる。

精薄者通所授産施設というのは、精神薄弱者福祉法によると、通所者に対し、自活のための職業訓練を施す施設ということになっている。

だが自活のための職業訓練とは、手に職をつけることだけではあるまい。他人の手を借りず衣服を着ることも、食事の煮炊きを覚えることも立派な自活であろう。

精薄者福祉法というのは、精薄者を縛るために作られたものではなく、あくまで、精薄者の福祉向上を図るために作られた法律のはずだ。

そのことを考えると精薄者通所授産施設の通所基準は、もっと弾力的運用を考えてもいいのではないか。

理由はどうあれ、このような形で無理やり重度者の自立の芽を摘むやり方は、福祉の切り捨てといわれても返す言葉があるまい。

県知事は職員に対する年頭のあいさつで「今年は国際青年年、青年のような挑戦する精神をもって、新しい豊かな国づくりに力いっぱい取り組み……」と訓示した。

福祉行政にいま問われていることは、現状維持ではなく、現状をいかに打破していくか、知事のいうチャレンジャー精神であろう。

要は福祉にたずさわる職員のやる気次第だ、国が重度者の通所はダメというなら、他にさがけて〇〇方式による重度者も通える県単独の特別ワクを設けてはどうか、それなら国も文句をいうまい。

福祉行政にとって大事なことは、日の当らぬ部分に光を当てる作業だ。手のかかるものを一番後回しにするのは、福祉とはいわない。教育の落ちこぼしも困るが、福祉の落ちこぼしはなお困る。

以上――

× × ×

先づ四人の重度者について、障害児学級、援護施設S園の当時、児童相談所（更生相談所）の検査を受けるべきであり、又職業適性に関する判定や指導をうけ、S園時代の実績を参考にして処理すべきではないかと考えます。それは、本人の自活への意志が問題であり、又保護者の熱意にあると思います。

そこで、福祉施設の歴史を考えますと、当初は、障害者に対して慈善家、宗教家が、発願して社会の善意に支えられて施設が出来、やがて多くなるにつれて、その統制上、国が制度化して来たものです。当初は社会事業といい、民間篤志家が手を差しのべたものです。然し一度制度化すると、建物土地には、最低の基準入所者には、その入所条件と所得に応じた徴収金を定める様になりました。

かくて、夫々の福祉法により老人、児童、

精薄児（者）、言語・身体障害者、及び授産等と多方面に発展し、オイルショックまで福祉は向上の一路をたどり、福祉施設の完備が整って来たのです。その中で一番遅れていたのが、精神薄弱者関係でした。それは、自分自らが、その現況をうったえる能力がなく、保護者が代って語るためでした。

然しここに問題を含んでいるのです。それは人権の問題です。一度施設に入所すれば、家庭との隔りが出来、親子の情、家庭の情と人間関係が薄くなって来たのです。

国際障害者年を基点として、社会の出来事は、社会共同の責任において解決すべきだ。障害者も社会の一員なのだ。社会の責任に於いて平等と自由の精神において対処すべしとの思想が起り、保護者も障害者もその考えの下での社会の生活を考える様になり、在宅福祉の現代となりました。障害者とのふれあい広場、や障害者の船もその一例です。

然し、先に申しました精薄者の福祉は、福

社の谷間として問題が多く、在宅福祉の一つとして、精神薄弱者育成会が国に働いて救護事業として小規模授産所を各県に提唱し、S園もその一つでした。その結果通所授産施設が出来て来ました。社会福祉の流れを一応知って頂いたと思います。

今この様な言葉が、障害者の間で使用されています。「私の証しを」、「私がこの世に生きている証しを教えて下さい」、「私のこの世に生まれた尊い生命、その使命は何ですか」。精薄者も軽度、中度、重度の程度はあれ、それぞれ尊い生命であり、仕事も出来るのです。口には云うことは出来ませんが、一つ人格者です。ただ、智能がおくれているために、差別されている。平等の人間として取扱って頂きたいのです。

× × ×

精神薄弱者通所授産施設について、その現

況の一つとして私の経営する「八風園」を知って頂けば、新聞の記事も生きてくるのではないかと思います。

山には立派な杉山もあるが又雑木の茂った山もある。誰もが杉山にしたいが、土地の関係で雑木の山にしかない。然し雑木の山は、何か温かいものが感じられる。八風園は、軽度、中度、重度夫々十名入所しています。健康状況は、テンカン八名、言語・身体・内臓障害などの二重障害者。入所者は解雇者、就業未能者、平均年齢二十六歳。仕事は単純作業、重度は割箸の袋入。中度軽度はデパートの箱折、しいたけの袋入。みんなそれぞれの程度に応じて作業する。自治会もあって、お互いに助けあい、励ましあっている。人間性はまことに豊かであります。三年間も過ぎて、障害者の授産に、新しい企画をもって進むべきです。福祉は、無限です。雑木の山も杉山もほしいものです。

浄土宗のハワイ開教（続）

新保義道

（前浄土宗ハワイ開教総監）

ハワイ開教のパイオニアたちの血と汗の苦勞の跡をという読者のご要望により、今回は、開教初期の実情を紹介する。

初期日本人移民の多くは、当時ハワイ最大の産業であった砂糖耕作の労働に従事したのである。各島共、行けども行けども続く砂糖黍畑の中に、就業上の便利を図る為に幾マイルずつかに離れて、とびとびに労

働者用キャンプ（館布とも書き、労働者用に耕地が造った舎宅の集った部落）がA耕地からB耕地へと続いていた。その居住する家屋は平屋建て板壁で、石灰を塗った実に粗末不完全なものであった。森田栄著「布哇五十年史」によると、夫婦者には十畝と二十四・五畝平方の一室、独身者は二十四・五畝と七・八十畝平方の大部屋に七・八名から十四・五名が同居させられた。そしてこれら家屋の監督及び取締りは耕地雇いの巡査（キャンプ巡査と称した）と日本人掛りの通弁が当たっていた。然し日本人以外の各国労働者には一棟の家屋を与えていたと言うから非常に差別的であった。そして耕地内には、砂糖黍及び労働者を運搬する為に製糖工場より東西縦横に数十線の軽便鉄道（筆者注 現在マウイ島ラハイナにある観光用の砂糖黍列車はこれの模造である）が布設されてあった。

労働者の日常はと言うと、総ての労働者は毎日午前四時半に製糖工場で鳴らす汽笛と共に起床し、労働服に着替え、朝食を終え、弁当を携えて汽車に乗って野（砂糖黍畑）に運ばれ、午前六時就業、午前十一時半から三十分間が昼食時間、午後四時半（土曜日のみ四時）終業、その間は一服の休み時間も無い重労働であった。一日の仕事を終え家に帰り、大浴場（耕主が薪を給与して日本人に請負せたもの）に入って一日の垢汗を洗い落とし、夕食を終えて夫々の部屋へ戻り雑務を処理したり雑談にふけて夜九時就寝というのが日課であった。これらの労働者の中には文学修養に心掛け、或は夜学に通って勉学する者も少なくなく、何れの耕地に於ても最初の内は極めて真面目に働いていた。血氣盛りの若者たちの多くが独身で家庭が無いから氣性が殺伐となったり、これといった娯楽が無いところから、ツイバクチと酒と女ということになるのも無理からぬことであった。これに拍車をかけたのが日本からの無頼漢が移民に身をやつして渡航してきたことであった。中には夫婦者でありながら周囲に引かれてバクチや酒にひたり、その負債を償う為に妻を売るものさえあり、反対に夫や子供を残して他の男と逃亡する妻さえ稀にはあったという。

これに対し開教使側の日常について、当時数少なかった開教助員（開教使夫人）立川サエが「日本女性立

川サニの生活史」の中で次のように述べている。

朝四時起床、寄宿生（筆者注 当時の殆んどの仏教寺院は日本人小学校と寄宿舎を持っていて、遠近の日本人子女を収容していた）のうちの上級生の女子に手伝わせ、大きな釜で朝食の用意をする。主人は四時半に起床して鐘を鳴らして一時間位寄宿生と一緒にとおつとめし、六時頃朝食。それから子供達が集ってくるので公立学校始業前一時間日本語教育をする。子供達が登校した後は庭やルームの掃除や洗濯。洗濯は石油のアイロンの無い）をかける。これが子供が帰ってくる頃まで続く時は大きな女の子が手伝いもする。主人の方は布教の準備もする。母親の無い子供の為にはパンツ等の仕立もする。そして公立学校の放課後は、再び修身や日本語の授業が始まる。主人は夕方五時頃から砂糖黍畑を通ってキャンプに布教に行く。説教が終わってからは、独身者が多いので、日本からワイフを呼び寄せる手続きの手伝いや手紙の代筆等をして、帰るのが午前一時頃（時には二時）。帰って馬にまぐさをやり、お茶を飲んで寝るという状態であった。「眠むとうて眠むとうて仕方がない。ことに夜、眠むとうて眠むとうて」「よく続いたものです」と述懐している。

上述のように昼は皆仕事に出てキャンプには誰もいないので、開教使は耕地の仕事が終わった頃を見はからって徒歩又は馬でキャンプの布教に出かけるが、布教といっても招かれざる客である。布教の話を持ち出すと、「『仏さんの話かい、そんなつまらぬ話を聞くよりうちで酒でも飲んで寝ていた方がよい』とあいさつされる有様であった」（本派本願寺第二代監督今村恵猛の述懐、或は「坊主か縁起でも無い」とか、「塩をまけ」とか言われる始末、やっと少数の人を説得して部屋の間で説教を始めても、一方では酒宴が始まり、トバクが開かれるのであるから聞く方は上の空である。このような状態でもとに角説教を続

ける。時には遅くなって蚕棚のようなキャンプの寝台を借りて寝てしまうこともあり、朝四時半の鳴笛に起されて一人トボトボ帰路につくこともあったという。

然し何れの開教使も最初から馬を持った者として無く、徒歩で、而も夕方近くになって遠近のキャンプへ説教に出かける。徒歩であるから近道をとることが多い。特に帰りは夜間であるので、「砂糖黍畑やキャベ林の真唯中で迷子となって野宿をしたり、足の裏の底まめの為進退谷まったり強烈なスコールに襲われて全身濡れ鼠になったり、空腹に悩まされた。このような窮状を目撃した人達が、抛金して百余ドルで馬及び馬具一式を寄進してくれた」（ブウネム仏教会堂創立者原聖道手記）という。

「当時の労働者の多くは独身であった為、流行病等にかかると誰も介抱する者がいないので、病人の世話に当った」（ブウネム二代大田秀山夫人アイ手記）などということでもあった。

一部上述したが、この開教初期には事情不案内な異人に於いて言葉が通じないことから起る誤解や、長時間の炎天下の不慣れた作業の苦しみ、そして耕主側の奴隸的酷使や虐待に対してはブリキ缶を叩いての多数の力で対抗するより方法が無かったので、どの砂糖耕地でもストライキが続発した。ストライキの範囲は小さいが、そのかわり常に何処かで起きているということで、大小六〇七百の紛争があったと言われている。このようなことから日本人に対する風当たりも、時と処によってはきわめて強いものがあったことも否めない。

「ハマクア耕地で日本人ルナが乗馬中後から投げ縄で引き落されリンチされたことがあり、自分も同様な危険に遭いつつも難を免れた経験があった」（ハマクア仏教会堂第三代池田常然）

「我々の布教は暮れ方より乗馬して労働者キャンプを訪ね深夜帰宅するという状態で、その帰途谷底に架けられた橋が雑木で遮ってある時があり、危険なので周囲に拳銃を発射して警戒しながらそれを取り除いて渡ったこともある」（同第四代吉田良雄）

又当時のキャンプからキャンプへの道は現在ほど立派なもので無く、特にハワイ島の地勢は高低が多く、恐らく開教使自身も乗馬の訓練を受けたことが無かったと思うので、馴れない夜道を丘を越え谷を渡る時に落馬することも度々あったようである。

「或る夜帰宅の途中落馬し、馬は山腹のキャンプへ戻ってしまひ止むなく燐燐で夜を明かし、翌朝帰宅した」(ラウバホエホエ教会第七代佐山学順)、「深夜布教の帰途乗馬諸共谷底へ転落して、そのまま夜を明かして帰宅した」(ハカラウ教会第四代立川真教)

「在任当時巡廻布教で労働者を訪問したが昼間は相手にされず、ヤシの実やバナナを食ってその日を過した」(ハマクア第二代田中摩訶衍)

以上五人については、ラウバホエホエ八代太田邦雄(大正七年—一九一八年来布)の手記による。

又次のような笑えない秘話が常光浩然著「布哇仏教史話」に載っている。

「ある時、開教使がはるばる耕地のキャンプを訪問すると、いつになく若い者がいていねいに迎え、紅葉(筆者注「茶」?)などを入れてくれる。きわめて愛想がよいがいくら待っても人が集まってくれぬ。どうして他の者が参らぬかときくと、実はあなたがお出で下さるといふので、みんなでクジを引いて、私が接待係の貧乏クジを引きました。他の者はみんなあちらでバクチを打っていますという。人が集まらないのも道理である」

「やっと五マイルも十マイルも離れた耕地のキャンプに行ってみると、今日は頼母子だから説教は止めてくれ、今日は浪花節があるから帰ってくれという。またどうにか説教をしても一人がファイブセン(五仙)を出すぐらいのことである」

「ある開教使がキャンプを訪問して余り時間が遅くなったので、キャンプの隅の方にある空いた部屋に泊めてもらうことにした。ところが夜中になってどんどん戸をたたく者がある。それでも黙っているとま

すまず激しく戸をたたく。この音に目をさました世話人が、たまりかねて外へ出て何かヒソヒソと話をし、戸をたたく者を帰した様子である。あとで世話人にきくと、実はこの部屋は淫売婦がここに泊るところです。今晚、この部屋に灯りがついているので、あなたを淫売婦と思って戸をたたいたのです、と」

上述のように、多くは二十代の若い開教使が、全く見ず知らずの土地、而も浄土宗信徒の少ないハワイに来て、最初はホテルを利用することもあったが、日本の飯場に等しい労務住宅の一室を借りて仮布教場とし伝道を始めた。マウイ島ブウネネに例をとると、ブウネネ耕地の耕主は宣教師の子孫であり、支配階級の人々は総てキリスト教徒であるところから、日本人労働者にはキリスト教会に出入りすることが有利な仕事にありつけるといふ考えの人もあるところから、原聖道は耕主に対し、「仏教の開教使としてブウネネ耕地に常在し、仏教の伝道をする」ことの承認を求めた。初めはキリスト教徒たる耕主は、仏教伝道に難色を示したが、再三にわたる懇請に、その熱意に感じてこれを承認し、労働者用舎宅の一室を貸与した。居所が定まったので部屋の一隅に仏壇を設け、紙製黒本尊の御影を祀り、丸型ボテトを二分してこれに竹箸を立てて一對の「ろうそく立」とし、空のラムネびん二本で一對の「花立」とし、茶呑茶碗に灰を入れて「香爐」として仏前を荘厳し、入仏式を挙げ（原聖道手記・詳しくは拙稿「カフルイ（旧ブウネネ）浄土院史」参照）ている。原聖道はここを根拠として遠近のキャンプ（馬の寄進を受けてから約四十キロ離れたラハイナまで出張している）を夜間訪問している。

このような環境の中で布教に従事し、教会堂を建てるのが出来たというのは、血と汗の努力があった外に、これらパイオニアたちは若年と雖も余程徳行が優れ、思想堅固で、仏法弘通の信念に燃えた人たちばかりであったと言えよう。

大伴旅人讃酒歌の真意

—万葉集歌疑義—

はじめに

私は本年八十歳であり、学生時代から略々五十年余年、芭蕉美学を専攻している者である。

先年、その第六著『然び・佗び・挽り論—その語原的・美学的語義—』を、杉山七郎氏の序文によって、上梓したが、(ベリカン社刊) 続いて最終著『芭蕉創作美学の体系』を刊行したのである。

しかしながら、兩三年前より、大分時間的余裕を生じたので、これも学生時代からの「座右の書」であったと

河^{こう}野^の喜^{よし}雄^お

(文芸評論家)



ころの、「論語」「新約聖書」および「万葉集」の、入念な再読を始めた。

聖書のこととは暫らく措くが、「論語」と「万葉集」との諸書の解説において、私が一驚したのは、諸先生方のお説が、頗る曖昧なものであり、「論語」においては、その哲学的解釈、「万葉集」においては、その詩歌的解釈が、極わめて乏しい——という一事であった。

例えば、「論語」「泰伯第八」・八の、

興^ニ於^ニ詩^ニ、立^ニ於^ニ礼^ニ、成^ニ於^ニ樂^ニ。

の解説において、吉川幸次郎氏は、

人間の教養の順序をいう。道徳的興奮の出発点とな

るのは、詩経である。何となればそれは、正しい感情の立場であるから。

などと説いておられるのであるが、本孔語は、白川静氏の言われているような、中国語独特の、「主語省略」の立言であって、その省略主語に言及せずして、「人間の教養は」などと言っているのは、明らかにおかしい。

本語に省略せられた主語は、私はハッキリと言うが、孔子哲学のメイン・テーマであり、その極少に「二人」と象徴せられたところの、共同社会の理念・目標である「仁」であつたのであり、その傍証として、「人倫第三」・三に、

人而不_レ仁、如_レ礼何。人而不_レ仁、如_レ樂何。

の孔語が、チャンと存するのである。

そして、その「興於詩」とは、その「仁」が、「詩経」自体に発する——などではなくって、これも孔語において、

詩三百、一言以蔽之。曰、思無邪。

と断ぜられているところの、その「詩心」、すなわち、他でもないその「詩経」を吟出したところの世紀前七・八—十二・三世紀の上代古人の、原始素朴・初心思無邪

な精神——に初発する、の意である。

その「詩心」的心情と、二人調和の形式である「礼」とによって、「仁」は一応社会的に成立するが、すでにして其処には、内容と形式との対立・二律背反が存し、それを止揚・統一するものこそ、他ならぬ「樂」である——というのが、本孔語の基本的な主旨なのである。その「仁」が、共同社会の理念であることは、

志_ニ於道_一、挺_ニ於德_一、依_ニ於仁_一、游_ニ於芸_一。

の孔語によっても、疑いあるまい。

なお、「先進第十一」・一、「子路第十三」・二七、「学而第一」・三の孔語は、本孔語の私解を、十分に傍証するであらう。

ところで問題は、ここに、「万葉集」の歌解においても、全く同様であるということである。

例えば巻二・一三七の人麿歌に、

秋山爾 落黄葉 須臾者 勿教乱曾 妹之当将見。
の一首が存する。

この本歌の第四句、「勿教乱曾」の「乱」字を訓じて、佐々木信綱・岩波版「古典大系」本、小学館版「古典全集」本は、「まがふ」としてしているのであるが、「散り乱

れる」からこそ、「見まがふ」ので、この「乱る」「まがふ」の両語は、疑いもなく、前後・因果關係を存するのであり、その「前因」を示す「乱」字を、「後果」的に「まがふ」などと訓んでいるのは、失笑の外はない。そして、この「万葉集」中に、その撰者に擬せられてゐる家持の父・大伴旅人の、「讀酒歌十三首」なる名歌が存するのであるが、諸本、本歌の真義に、思い寄せていない——と考えるので、以下、本歌の真義に對するところの、私見を述べてみたい、と思う。

大宰帥大伴卿讀酒歌十三首

- 先づ、私訓に依つて、その十三首を掲げておこう。
- (1) 驗なき 物を念はずは 一杯の 濁れる酒を 飲むべくあらし。
 - (2) 酒の名を 聖と負せし 古への 大き聖の 言の宜しさ。
 - (3) 古への 七の賢こき 人ども 欲りせしものは 酒にしあらし。
 - (4) 賢しきと 物言はむよは 酒飲みて 酔ひ泣きす

- るし 勝りたるらし。
- (5) 言はむ術 為む術知らに 極まりて 貴きものは 酒にしあらし。
 - (6) 却々に 人とあらずは 酒壺に なりにとしかも 酒に染みなむ。
 - (7) あな醜く 賢しちをすと 酒飲まぬ 人をよく見ば 猿にかも似る。
 - (8) 価なき 宝と言ふとも 一杯の 濁れる酒に 豈まさらめや。
 - (9) 夜光る 玉と言ふとも 酒飲みて 情を遣るに 豈若かめやも。
 - (10) 世の中の 遊びの道に 治ねきは 酔ひ哭きするに 有るべからし。
 - (11) この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫に鳥にも 吾はなりなむ。
 - (12) 生けるもの 遂にも死ぬる ものにあれば 此の世なる間は 楽しくあらな。
 - (13) 黙居りて 賢しらすは 酒飲みて 酔ひ泣きするに なほ如かずけり。
- 各首共、その歌意極わめて明瞭であつて、能く首肯・

納得出来るとともに、これを味吟・熟読するとき、其処には如実・入神なるところの、高く、深い「象徴」が感取せられる。

「歌」というものは、必ずや、「歌われる」ものであるから、僅々三十一字を歌い了えるには、極わめて短時間である。そして、その短時間に歌い了えられた直後に、聴き手に、その歌意が納得出来るものでなければならぬ。「歌意明瞭」ということは、歌の第一義なのである。

本歌各首が、その「歌」の第一義を完備していることは、誰しもこれを否むまい。

万葉学者先生方の諸本には、頗る七むずかしく、持つて廻ったところの解釈が少なくないのであるが、それは、先づその「歌」の大意を把握しようとせず、個々の語句的・語学的解釈のみに終始して、その歌意の詩歌的解釈に及ばないからであり、噴飯に耐えないような解さへも存する。

そしてその「歌」は、「歌つて」、その直後に相手を納得せしめるとともに、同時に、その自身の詠出的感動をも、相手に伝え得るものでなければならない。

本歌が、その好例であるように、一見、去り気なく、物に擬えて歌われていたにもせよ、これを熟読・玩味する時、その底には、深く、かつ高いところの、「象徴」Symbol が、確乎として、内蔵せられていなければならない。

そして、その「象徴」とは、翻訳語であるが、原語 Symbol, Symbole は、古代ギリシヤ語から、ラテン語・フランス語・英語となったものであって、その Sym は 'Syl, Syn 同様' together, with' bol は 'throw' を意味するので、これを意識して、「共に提出する」の意を解して、多く誤まるまい。「象徴」の語意自体、「あるもの」を「象どる徴」なのである。

例えば、富士山が如実に描出せられたならば、其処には必ずや、崇高・偉大・永遠と言ったようなものが、「共に提出」即「象徴」せられるであろう。

故にこの「象徴」の語は、「比喩」の語と、略々同義なのであって、クリストはその説教の際、常に「比喩」を用いた、とせられているのであるが、その有名な、

生命に至る門は窄く、その径は細く、これを見出す者、渺なし。(マタイ伝・七)

の語などには、如実に、高く、かつ深いところの「象徴」が感取せられるではないか。

そして、本「讀酒歌」の解においても、単にその表面的な歌意のみに止どまっていたのでは、決して、その真の歌解ではないのである。

私は以下、その内蔵・深遠なるところの、本歌の「象徴」に就て、私なりにそれを説いてみたい、と思う。

そして、その深遠なる、本歌の「象徴」を理解するためには、単なる現代的認識のみを以てしては、断じて不可能なのであつて、今から略々一三〇〇年前の作歌者・旅人を廻るところの、歴史的事実を、可及的的確に把握しての上で、その探究に進まなければならない。

故に私は、先づ「続日本紀」を主として、旅人自身の略歴とともに、彼を廻る関係人物・事実を提示しておきたい。

文武天皇大宝三年(七〇三)一月、正六位下藤原房前(不比等次男)を東海道に派遣。

文武天皇慶雲二年(七〇五)十二月、正六位上藤原武智麻呂(不比等長男)、房前、並從五位下。

文武天皇慶雲四年十月、房前造山陵司。

元明天皇和銅元年(七〇八)三月、大納言正二位藤原不比等右大臣、正三位大伴宿禰安磨(旅人の父)大納言。

元明天皇和銅三年(七一〇)一月、天皇、朝を受く。

左將軍正五位上大伴宿禰旅人等、皇城門外朱雀路東西に於て、分頭、騎兵を陳列、隼人・蝦夷等を引て進む。

元明天皇和銅四年四月、旅人從四位下。武智麻呂、房前並從五位上。

元明天皇和銅六年一月、武智麻呂從四位下。

元明天皇和銅七年五月、安麻呂薨。詔贈從二位。十一月、旅人左將軍。

元明天皇靈龜元年(七二五)一月、旅人・武智麻呂從四位上。房前從四位下。五月、旅人中務卿。

元明天皇養老元年(七二七)十月、房前朝政參議。十一月藤原麻呂(不比等四男)從五位下。

元明天皇養老二年三月、旅人中納言。九月、武智麻呂式部卿。

元明天皇養老三年一月、天皇朝を受く。武智麻呂等、皇太子(聖武)贊引。旅人、武智麻呂並正四位下、房前從四位上、宇合(不比等三男)正五位上。七月、宇

合、安房、上総、下総を管す。九月、旅人山背国撰官。

元正天皇養老四年(七三〇)三月、旅人征軍人持節大將軍。八月、勅に依り旅人入京。右大臣藤原不比等薨。十月、旅人長屋王と共に不比等第に赴き、詔に依り、太政大臣正一位を追贈。

元正天皇養老五年一月、旅人・武智麻呂・房前、並從三位。宇合正四位上。麻呂從四位上。武智麻呂、中納言。六月、麻呂左右京大夫。十一月、房前内臣、帝業輔翼。十二月、太上帝(元明)崩。武智麻呂、御装束事を行ない、旅人營陵事を供す。

元正天皇神龜元年(七二四)二月、皇太子(聖武)に讓位。旅人・武智麻呂・房前並正三位。四月、宇合持節大將軍。七月、夫人石川朝臣大延比亮薨。旅人、第に赴き、詔に依り、正二位を追贈。

聖武天皇神龜二年(七二五)閏一月、宇合、從三位勳二等。

聖武天皇神龜三年一月、麻呂正四位上。十月、宇合、知造難波宮事。

聖武天皇天平元年(七二九)二月、長屋王自尽せしめらる。三月、麻呂從三位。武智麻呂大納言。八月、光

明立后。九月、房前中務卿。

聖武天皇天平二年十月、旅人大納言。

聖武天皇天平三年一月。旅人從二位。七月旅人薨。八月、宇合・麻呂並參議。九月、武智麻呂大宰帥。十一月宇合、畿内惣管・諸道鎮揆使副總管。麻呂山陰道鎮揆使。

聖武天皇天平四年(七三二)八月、房前東海、東山二道節度使。宇合西海道節度使。

聖武天皇天平六年一月、武智麻呂從二位。宇合正三位。武智麻呂右大臣。

右の略歴で略々明らかなように、旅人は、朝廷の兵仗家として、歴代随一の大伴家の氏上の当主であって、和銅七年(七一四)五月、大納言兼大將軍で薨じて、「贈從二位」の、大伴安麻呂の長子であった。その安麻呂が、和銅元年(七〇八)三月、大納言になった時、安麻呂より一位上の、右大臣となったのが、鎌足の子の不比等だったものであり、当代において、大伴氏が、宮中第三位の高官であったことは、疑いない。

そして、その藤原氏一族と、大伴一族との相互関係こそが、本歌の真義を解するのに、必要不可欠なモーメン

トなのである。

上掲のように、旅人は七二〇年三月、征隼人持節大將軍を拜命して九州に赴任しているのであるが、おそらく半年程で征隼人を完了、八月には入京を命ぜられて居り、十月には薨去した不比等第に、長屋王とともに贈位使として遣わされ、翌七二一年十二月、元明帝の崩した時も、その營陵事に任ぜられているのであるが、元明帝は、すでに同年五月三日に、「不^{ハヤシ}予・大^{オホ}敵天下」とせられているので、旅人は、前年八月から在京したのか、または五月以降に入京を命ぜられたものと思われる。

そして、統紀には載せられていないのであるが、旅人は、その「征隼人」を完了した七二〇年八月頃に、大宰帥を拜命しているのがあって、爾後、七三〇年八月、大納言拜命・帰京まで、彼は実に満十年間、辺陲・九州に放任せられていたのがあった。

その大宰帥は、対外（中国・朝鮮）・対隼人の戦略的重要な拠点であって、歴代兵仗家が任じられ、兵職としては最高位であったので、旅人の父の安麻呂や、左大臣の最高位まで上った石上朝臣麻呂（大伴氏とともに兵仗家であっ

た物部氏の氏上）も、大宰帥に任じられたのであった。

けれどもその任期は、大抵三・四年であって、石上麻呂は七〇二—七〇四、旅人の父安麻呂は、七〇五—七〇八であったので、旅人も、当然、その程度の在任を予期していたに相違ない。

ところが、旅人は七二〇—七三〇と、実に満十年間余も、この辺陲に放任せられたのであって、その放任とは、他ならぬ藤原一族の、大陸伝来の、陰密にして徐々たるところの、醜惡なる謀略が存したのである。

鎌足以降、その子女を天皇の後宮に納れ、その言わば外孫たちを、天皇以下、朝廷の重要ポストに配置することに依り、いわゆる、「外戚」として、実質上、朝廷の実権を掌握していた藤原氏にとって、何よりも怖^{おそ}かったのは、歴代の兵仗家として、一族に依って、朝廷の兵権を掌握していたところの、大伴氏であったのである。

故にこそ、旅人の父の安麻呂も、鎌足の嫡子たる不比等が右大臣となった時、不比等の大納言を継いでいるのであり、旅人もまた、その大納言とまではなっているのである。

しかし、その旅人を大納言とするまでに、実に十年間

も、辺陲九州に放置しておいた、という事実、実に藤原氏の謀略が存していたのであって、氏上当主たる旅人を辺陲に放置することに依って、兵仗家一族の統帥力をチェックするとともに、その間に、自族に依るところの、全国的兵権把握を意図したのが、実に藤原氏であったのである。

そして、その事実は、上掲の略歴で明らかのように、旅人の薨じた天平三年(七三二)の九月には、武智麻呂大宰帥、宇合畿内惣管・諸道鎮捺使副惣管・麻呂山陰道鎮捺使、翌四年の八月には、房前東海・東山二道節度使・宇合西海道節度使となっており、わずかに南海道節度使のみが、三年に大伴道足が任じられていたのであって、その兵権の略々全国的掌握は、疑いないであろう。

旅人は、その大宰帥拜命当初は、勿論、そのような藤原氏一族の謀略は知らなかった。

当代随一・最高の兵職であったのだから、彼はおそらく喜んで、意気揚々と赴任したのであったろうし、「征隼人」後は、同地随一の高官として、両三年の間は、彼は悠揚として、その「帥」位に安んじていたであらう、と思われる。

ところが、四年経ち、五年経っても、一向に転任・帰京の勅命が来ない。そして、その頃から、全国諸地において、略々兵務關係を担当していたところの一族からも、種々の情報が寄せられて来たに相違ない。

そしてこの、七二五年頃の時点において、その詠歌にも略々窺がえるように、元来英明・叡知であった旅人が、藤原氏のこの陰密な謀略を察知したのであることは、尤に推することが出来よう。

彼は、勿論、衷心憤激した。そして、彼が驟然として起って、藤原一族の討滅を決行したならば、それは当然、成功したに違いない。

しかしながら、その藤原氏は、天皇家外戚として、天皇家と密着して居り、殊に旅人の帥拜命後、七二四年即位の聖武帝は、統紀に、

天之真宗豈祖父天皇(文武之皇子也。母曰藤原夫人(宮子)。贈太政大臣不比等之如也。

とあるように、不比等の外孫なのであるから、その藤原氏討滅を決行することなどは、到底不可能であったことは、これまた、疑いないであらう。

そして実に其処に、旅人の憤激とともに、人知れぬと

ころの、深甚なる懊惱を存したのであって、その切烈なる心情を、外発・自慰するの方途としては、実に、飲酒・酩酊以外にはなかったであろう。

おそらく七二五年以降、旅人は、巻五・「梅花歌三十二首」に窺えるように、その麾下の守・介・丞・目らを集めて、酒宴することが多かったであろうし、彼自身は、決して「酔い泣き」などはしなかったであろうが、部下の多くが、「酔い泣き」するまで泥酔するのを見つづ、寧ろ、その素朴な彼らの方が、表面的には恭儉・温譲を持しつづ、悪辣極まるところの謀略を、陰密・実施するところの藤原氏一族よりも、遙かに信頼・親愛出来たに相違ない。

勿論、彼はその憤激・懊惱し始めて以後、主として漢籍に依って、その「解脱」的手段・方法をも探索したに相違なく、本歌中、彼が酒名を「聖」とした古聖や、七賢の「愛酒」を挙げていることは、その聖賢らに示唆せられたのかも知れない。

そして、その旅人の、本歌詠出時における心症を、如上の如く解することに依って、本歌の「象徴」的真義は、如実に理解・納得し得るとともに、その真の詩歌的

感動を感取し得るのではなからうか。その各歌解は、今やおのずから明らかであるうが、本歌の第四・七・十三の「賢しみと酒飲まぬ」人が藤原氏一族を象徴することは、万、疑いなかろう。

◇“浄土句集”欄投稿要項

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先――

。千839―11 久留米市善導寺町飯田550

大本山善導寺 一 田牛 畝先生宛

。千812 福岡市博多区中呉服町10―14

正定寺 一 田牛 畝先生宛

。千102 東京都千代田区飯田橋1―11―6

法然上人讃仰会

浄土句集

一田牛畝選

福岡 前田 秀峰
楽しみに待ちたる京の無月かな

評 総本山や大本山の京の月を拝まんと楽しみに上洛したのに、雲に月は隠れて残念至極。待ちたる甲斐のなかりしことの悲しさよ。

福岡 釈河野ねはん
小春日の駱駝にゆられ砂漠ゆく

評 西安より敦煌へ玄奘三蔵が辿られたシルクロードを訪ねられたのである。駱駝に乗って砂漠を悠々と、小春日を授かつての旅。嗚ぞかし珍らしかったことであろう。

東京 吉田ゆきゑ
黄落や銀座通りの餡細工

評 歩行者天国で珍らしい昔ながらの餡細工を見られたのである。見ている間に次々に動物が作られて行く。東京のどまん中に、誠に愉快なことではある。銀座の柳も黄落して、懐旧の涙を流されしこと

ならん。

群馬 島津 か寿
亡き夫の風邪を引くなと夢に声

評 妻に看取られてお浄土まいるをされた夫が、夢に、風邪は万病の基であるからかからぬようにと注意して下さる。まことにありがたく涙にむせばれしことならん。

東京 吉原登起子
山葵田をあふれ湧き水崖に落つ

評 山葵の繁殖するところは湧水の空気も清い所で、あふるる水は崖を越えて落ちているのである。

福岡 原 敬二郎
老呆患一つおぼえの踊唄

福岡 安藤平次郎
佗助に灯籠の灯のおよびけり

東京 細田 初枝
和紙の裏指にたしかめ書く夜長

長野 友淵旋風子
短日や先讀り合ふ洗濯場

熊本 山崎 石庭
行満ちて退く堂の縁小春

福岡 荒牧 亀齡

寄鍋に紐かと思ふ海老の髭

福岡 服部 光代

諷誦に泣き法話に笑ひ十夜かな

福岡 稲永美恵子

熊本 山崎 松子

お十夜を終へて安堵の月拜む

入院の母を呼びつつ孫夜長

福岡 山崎 鬼川

東京 小笠原香祥

日記買ふ淡き願ひのあるごとく

聴聞の堂よりこぼれ十夜かな

あれこれと宅急便でお歳暮を

東京 真野よし子

短日や心せわしき老の日々

結婚の用意も兼ねて冬構

菊の香や大往生の天寿仏

東京 猪瀬 幸子

みんなの海へ展ける冬菜畑

新嫁も交り見習ふ十夜齋

入り相ひの鐘にしつかり手を合す

福岡 上滝津弥音

目立つなく紅葉して散る桜かな

十夜粥注ぐや袂に数珠入れて

ふる里の棚田映田も豊の秋

福岡 荒牧 還愚

双盤をたたき念仏の十夜かな

散り積る銀杏瓦の見えぬ程

苔むせる流人の墓や島の秋

東京 末常てる子

白菜を梅に昔は漬けるしに

父の忌の仏間の障子先づ貼りぬ

開口に春の風邪詫び高座僧

一田 牛畝

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八―八二―八七

立ち止まるな善導

〈8〉

寺内大吉

挿絵・松 清 達 文

前章・絶唱の經典 (八)

二十二

もはやマトナ阿闍梨が大座仏塔のすべてを
 “青衣の鬼”——訶利多種王へ売り渡した事
 実は明白であった。仏塔内にあつて持導的立
 場にいた長老や沙門の死体を、少年サビヤは
 山塊の裂け目や谷底で次々と視認した。仏塔

内には朱駒波城からきた城兵があふれ、不安
 におののく信徒たちを説得している元気なマ
 トナ阿闍梨を遠望することもできた。
 城兵を仏塔内へ引き入れ、大乘教を棄てな
 い僧俗を容赦なく殺害していったにちがいな
 い。思えば王城の乳母カナウジがこの仏塔
 へ現れた時点で疑ぐつてかかるべきだったも
 のだ、と少年サビヤは後悔する。



乳母カナウジは誰の導きによって秘密だった仏塔への登頂路を探ぐり得たのであろうか。駱駝夫人に問いただしても最近の乳母の動きは謎に満ちていたようである。朱駒波城内で沙門竜猛が消された事実とも密接にかかわってくる。

サビヤは四日間を崖面の穴倉で駱駝夫人とすごした。でも夜になると少年は精力的に仏塔の周辺を動きまわった。これらの情報入手に専念した。さらにタバス尊者の生死も追ってみた。

しかしタバス尊者の姿も夜叉樹林からかき消えていた。そこを三人の隠れ場所と指示したのは阿闍梨ではなかったか。ここにも裏切りの決定的な証固があった。

五日目の明け方、少年サビヤは駱駝夫人がいる穴倉へ戻ってきた。

「未だ訶利多種王は立ち去らない様子ですよ」

かぶっていた野牛の皮を脱ぎながら言っ

た。サビヤは外出時、いつもこれを用いることにしている。夜目には、獣がうごめくように見えるからだ。

王妃は無煙火でぬくめた石碗の麦粥を少年にすすめた。

「妾が故郷の范陽へ脱出するのを、王は恐れているにちがいありません」

范陽。現在でいうバーミヤンである。ヒンドウ・クシュの雪山を抜けてアフガニスタンからインドへ通ずる峡谷添いの集落で、駱駝夫人の故国だった。

そこへ戻れば父王や兄たちが近隣の諸部族を語らって朱駒波城へ攻め寄せてくることを、訶利多種王は知っているのだ、とも言葉を添えた。

「それでは何としても范陽へ帰らなければいけませんね」

「復讐はともかく妾はあの仏の国へ帰りたいのです」

「仏の国……」

いつかも彼女の口から聞いた。パーミヤンの峽谷には巨大な石仏がそびえ立っているとか。

麦粥を食べおわり、少年サビヤは扉口に近い寝棚に身を横たえた。

三坪そこそこの狭い洞窟だったが、かつて誰かが穴居していたにちがいない。中央に火石や水鉢を置くテーパー状の長石があり、三方の岩壁には明らかに人の手によって寝棚が削られていた。

サビヤは王妃が獣油の燈芯を吹き消し、奥の寝棚へ上がる気配を記憶に残しただけで深い眠りへ落ちこんだ。

ほんの一瞬のまどろみ、と即断してみたが時間は意外に素速く流れ去っていたようである。穴倉の入口に立てかけた岩板やその外側をおおう落葉樹の根っ子を縫って鋭く朝の光りがさしこんでいた。

「鋭く」見えたのは、その白糸の世界がさらに白い物体を描きとったことで光度を倍加

させていたからである。

駱駝夫人が立ちほだかっている。少年のすぐ眼路の先だった。全裸である。

いつもまどっている麻の商那衣を脱ぎ去ると、王妃の肌はまばゆいばかりに白かった。浅黒かった顔色は、風光のせいであろう。

商那衣――

少年サビヤはあとでその由来を知った。パーミヤン地方の男女が着ている。釈尊が入寂した直後、王舎城の街に住む商那和修という長者が仏門に帰依して阿難尊者の弟子となった。

商那和修は各地を遊化して遠くパーミヤンまでやってきた。此処に滞在し多くの仏弟子をつくった。仏法の花開き、近隣の者たちは商那和修が着ていた麻衣を日常服とするようになった。

当然それは僧衣なのだが、毛皮を縋いませたりして実用性を高めた。異族の者は「商那衣」と呼んで、この峽谷部族を区別した。

駱駝夫人は朱駒波城へ輿入れしたあとも生国の衣裳を脱がなかった。それが今、すべてを捨て去って少年の眼路に立ちはだかっている。

「王妃よ」

少年サビヤはまばゆさに耐えきれず、顔をそむけた。拒絶の声であったか。

この短い数日間における駱駝夫人とのふれ合いが瞬時のうちに脳裡を駆けめぐった。どれも王妃を男性として意識したふれ合いであった。

「妾を故郷へ連れ帰って下さい」

白条と白い立体との交叉が崩れた。立体は消えて白条だけが洞窟の空間を流れた。少年サビヤはすり寄ってきた冷めたい女体を肌で感じた。しなやかな腕が首に巻きついてきた。

墮落、とは思わなかった。不倫へのうしろめたさはない。

王妃は悪王の虎口を脱して故郷へ帰ること

を願っている。自分は全エネルギーを傾けてその願いを傾けてやればいいのだ。

その全エネルギーを傾けるためには、とサビヤは掌心で王妃の胸にある二つの蕾をたしかめながら自分を納得させる。このナマ臭い情念がなかったら、本気で彼女を救出する気にはなれないであろう。

現にあのマトナ阿闍梨はどうだ。

釈明は残されているだろう。信徒大衆を「青衣の鬼」から救うために出家者たちが犠牲になったのだと。そしてタバス尊者を、その他の沙門たちを殺害させてしまった。裏切りである。

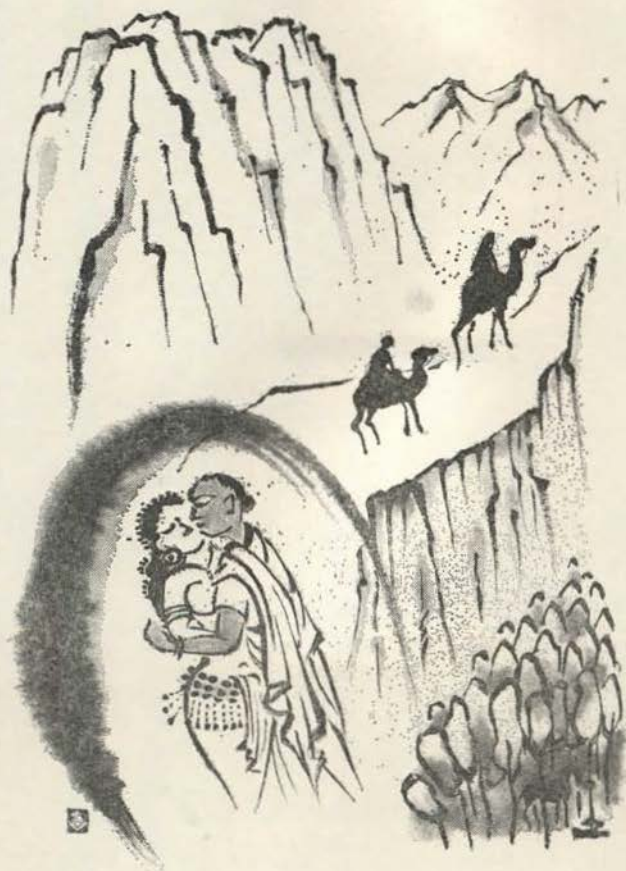
裏切らないためには、人間が一つの真実で結びつくためには、汚かれ、悪習、煩惱、これらの接着剤を絶対に必要とするのではないだろうか。

すでに少年と王妃とは、もつれ合う一個の肉塊と化していた。

洞窟内の小さな嵐がすぎ去って、狭い寝棚

☆☆

方
策



に二人は身を寄せ合って横たわった。少年の指が王妃の耳にふれた。石粒がはめこまれていた。

「これは外ずせる？」

「欲しいの、あなた」

一つ接吻をしてから王妃は訊いた。

「私のものにするのではない。これはあなたの足跡になる」

「足跡……」

「これが落ちていた方向へ追手は走るだろう」

早くも少年サビヤは駱駝夫人を故郷へ帰すための方策をめぐらしているのだった。

二十三

少年サビヤは王妃の装身具を点検する。

耳飾り、腕輪、麻衣に絹の下着。けばけばしい房（ふさ）のついた帯があった。

「これを？」

「外出するときは付けなければど宮廷内ではいつも此処に巻いています」

駱駝夫人は説明した。

太腿のふくらみや秘部のなまめかしさを強調するための腰帯だった。ほんらいはインド内陸部で常用され「女陰飾り」などとも呼ばれた。下着の中心部へフンドシのように巻きつけて、房飾りを股間に垂れ下がらせている。この挑発腰帯が、いつか小アジアの未開種族の間でも愛用されるようになった。

「王妃よ、あなたの故郷范陽へ帰るには道が二つある。ここから恐靈樹林を抜けて綿花城へ至る道だ」

「もう一つは」

「大きく東側へ迂回し、玉の街に達し、そこから大沙漠を突破する。どちらの道をえらぶうか。前の道は近いが危険度も高い。後者は遠く、たいへん時間がかかる」

「……」

駱駝夫人は思案して黙りこんだ。

綿花城——現在のヤルカンドである。朱駒波城からそこへ出るためには恐靈樹林と呼ばれる深い密林を脱けてゆかねばならない。

玉の街へつらなる道はバミール高原を徐々につけてゆく表街道だ。玉の街——佉沙国（かさ）と呼ばれ、現在のカシュガルにあたる。その徒多河からは美しい自然石が採掘され、磨かれて装身石となった。

ヤルカンドからは、いきなりバミール溪谷のあるヒンドウ・クシュの山塊へはいれるが、カシュガルからは沙漠を越えてアムダリヤ川添いに南下してゆく大迂回コースとなる。

「サビヤよ」

やがて駱駝夫人は愛にうるもった眸をあげた。

「どちらにしますか」

「この旅は一日でも長い方が……」

旅の性格を「愛の逃避行」とすることで彼女が決断したようである。故郷のバミール

へ帰着すれば彼女は再び「王家の人」に戻らねばならない。少年と、いわんや沙弥のサビヤとの関係を持続するのはむずかしいはずであった。

「よろしい。そうと決まればそのように出立の準備をします。今日一杯かかるでしょう」

「どんな準備をするのですか」

「さっきも言ったようにに、あなたの足跡を恐靈樹林のなかへ残しておきます。そして今夜おそく此処を出ます。よく眠っておいて下さい。それから衣類ですが、これに着換えて」と彼自身が朱駒波の街へ潜入するとき常用する馬皮の牧童服をさし出した。

「これ、あなたのものね」

「馬臭さいけど、我慢して下さいよ」

「あなたが肌身に付けていたものなら、何でも着ますわ」

駱駝夫人は惜しげもなく商那衣を脱ぎ捨てた。牧童姿になると、これで似合うか、とサ

ビヤの印象を求めながら身体を寄せてきた。深い接吻をかわしたとき、少年は王妃の髪を掴んだ。

「そうだ。この髪も今夜までに切り落して下さい」

「髪を……」

さすがに悲しげな表情になった。

「これくらいに刈ってしまうのです」

と少年サビヤは自分の頭を突き出して、山刀を手渡した。

サビヤはそのまま穴倉を出た。急斜面を駅路の方へ滑り降りていった。まず馬を一頭、借り出さねばならない。顔見知りの牧家へはいつていった。

いつもだとも何も訊かずに貸してくれる主人が、今日は貸し賃の前払いを要求した。

「城主が仏塔へはいりこんだと言うではないか」

最新情報をちゃんと掴んでいる。

「そうらしいな」

「あんたが城主の手下か、追われる組か、わしは知らん。またたしかめる手だてもない。ここはあとくされがないように」

現金取引きしよう、と提案してくる。無理からぬことであった。

サビヤは、かついできた袋を地上へおろした。現金の持ち合わせはなかった。王妃の腕輪を街で売り払い、それを貸し賃にあてるつもりだったのだ。いまはこの腕輪を直接牧家の主人に手渡ししか方法はない。

「その代金は、わしが払おう」

牧畜小屋の奥で聞き馴れた声がした。声の主はじきに現れた。

「あっ、阿闍梨」

マトナ阿闍梨であった。すでに先まわりして待ち伏せていたのか。それとも偶然の出会いが。

「サビヤよ。事態はこうなっちゃった。お互いに何を語っても意味を失った」

「……」

「サビヤよ。逃げよ。逃げる費用ぐらいは、わしに面倒をみさせてくれ」

マトナ阿闍梨がこのたびの行動で強くおのれを責め立てていることはまぎれもない。しかし、それにしては余りにも高価な代償ではないか。仏塔教団を根こそぎにして、少年沙弥を一人だけ逃がしてやるというのであるか。それが何の償いになるだろう。

マトナ阿闍梨は牧家の主人に馬一頭を買い取る分の金を与えた。さらに小袋一個を少年に手渡してきた。

「ここに幾分か砂金がある。これで逃げられるだけ逃げよ」

「……」

「サビヤよ。わしはもう駄目だが、お前はやって欲しい。大乘經典をきわめよ」

もはや引かれ者の小唄以外の何ものでもない。るまい。

「阿闍梨もお達者で」

サビヤは買いうけた馬の背にまたがると、

尻にひと鞭あてた。

駅路を朱駒波城の方へ飛ばしながらサビヤは馬上で呟いていた。

「一度、裏切った者は、必ず二度目を裏切るだろう」

あの場では自分の逃亡を助けたマトナ阿闍梨だったが、やがて「青衣の鬼」の前へまかり出ると、こんな言葉を告げるにちがいない。

——王よ。いま有力な情報を掴んでまいりました。王妃を連れ出した少年沙弥です。彼は馬を飛ばして朱駒波城の方へ向いました。必ず途中のどこかに王妃をかくまっているのでしょう。彼らは范陽へ逃げるはずですよ。

あの場では良心の呵責から逃がしたものの、悪王の前へ出ればわが身がいとおしくなるにきまっているのだ。

すでに夕暮れが迫っていた。

この日も朱駒波城の上空は、いつもと同じただずまいであった。鴉の群れが空をまっ黒

に染めて群舞している。

少年サビヤはそれを遠望すると、街の手前で右折して駅路から別れていった。深い樹林が延々とつらなるのである。

恐靈樹林と呼ばれるぶ気味な森であった。

二十四

恐靈樹林も伝説の森である。

・ 積尊が在世したときのことであった。多くの弟子たちを連れて、その森の前を通りかかった。暑気のきびしい季節で、深い葉波でおおわれたこの暗い樹林はいかにも涼し気であった。仏弟子たちはそこへはいつて坐禅を組もうとしたが、積尊は強く制止した。

「この森へはいつてはならない」

「なぜでしょうか」

不審に思って高弟舍利弗が訊いた。

「此処はむかし、随葉仏という仏が修行した場所だからだ」

「随葉仏？ そのお方が何か悪事でも働いたのでしょうか」

「悪事……滅相もない。随葉仏は心操清らかで、修行態度もきびしく、すぐれた仏であった。ただ……」

「ただ、何でしょうか」

「この仏は、この森に籠もったきり一步も外へ出ようとはしなかった。此処で体得したことを誰にも伝えようとはしなかった」

「ご自分だけで独り占めなさったんですね」
「そうだ。悟った内容は一人でも多くの者に分かち与えねばならない。私自身もかつてこの奥でひとり坐ってみたことがある。たしかに涼しく、静かで、居心地が良かった。居心地が良すぎて、此処から立ち去るのが嫌になった」

「随葉仏も同じ気分だったのでしょうか」

「そうだ。そのままだけでなくなった。私は、その間違ひを知って森を脱出したのだが、立ち去るのにひどく苦勞をした。未だ修行の

足りないお前たちの何人かは、いったん踏みこむと骸骨になってもなお坐り続けているであらう」

教団組織の必要性を説いた逸話だが、釈尊滅後この恐霊樹林が各地に発生した。いずれも無名僧たちの遺体を埋葬した森林に名づけられたものである。彼らが修法半ばで倒れた事実を随葉仏の故事に結びつけたのであった。

朱駒波城郊外にある恐霊樹林もまた、無名僧や居士信女の墓地にあてられている。昼なお暗く、ぶ気味な陰風が背筋を撫でまわし、動くものは梢にとまる鴉の群ればかりである。

朝な夕な街の上空をおおう鴉の大群もじつはこの森から飛び立ってくるのである。

少年サビヤは、このぶ気味な森へ馬を乗り入れた。石を積んだだけの簡粗なストゥーパの群れが点在している。頭上の梢では鴉たちが黙りこくってサビヤを見おろしている。

歩き進みながら腕輪や瓔珞を地上へ少しづつ落していった。やや大ぶりのストゥーパの背後へ王妃の商那衣を引き裂いて置いた。

最後は乗馬の処置だった。これは簡単である。ゆくゆくは立ち木に手綱を縛りつけた。こうしておくと、野性化した鴉の群れが必ず襲いかかってくるはずだった。馬には可愛想だが、その両眼をえぐり取られてしまう。そのあと死肉を喰い散らされることになる。

馬の残骸や商那衣の切れ端は何を物語るであらうか。馬でこの森へ逃げこんだ王妃は、やがて林中にひそむ賊に襲われる。裸に剥がれて犯されたのだ。

そのまま殺されたか、拉致されたか。追手は深い森のなかを探がしまわることである。

すべての処置を終えて、少年サビヤは森を出た。駅路をこんどは徒歩で引き返していった。途中で見知らぬ牧家へ立ち寄った。マトナ阿闍梨からもらった砂金の小袋をそっくり

その主婦へ手渡した。牛を一頭と山羊四匹に換えた。

これでは頂戴し過ぎだと主婦は小袋の中味を覗きこんで恐縮した。サビヤはそれならば、と馬麦を大袋一杯添えてもらった。家畜たちの飼料にもなるし、時と場合によっては自分たちの食糧ともなる。

穴倉へ帰り着いて、待ちわびた王妃の手を取って駅路まで再び滑りおりていった。

「危険はこれからのわずかな時間ですよ」

この夜更け、大雪山に月はなかった。斜面も駅路も物影一つ動く気配もない。

「これに乗りなさい」

王妃を牛の背へ横坐りにさせた。それを先頭にゆかせ、サビヤは背後から山羊を追ってついてゆく。

じきに夜が明けてきた。

もはや安全だと思った。牧童の二人づれが家畜に草を食べさせるべく早起きしただけの構図ではないか。

「このまま砂漠へいくの」

牛の背で王妃は訊いてくる。

「玉の町へ着いたら、この牛や羊を駱駝に置き替えますよ」

「ああ、駱駝にね。妾が朱駒波城へ来たときと同じ姿だわ」

「そのときは美しく着飾って、お供の者も沢山いたんでしょうね」

「そりゃあ」

「それが今は、そんな頭になって、着てるものは汚たならしい牧童服だ」

「いいえ、あなたと一緒にの旅なら全く苦にならなくてよ」

王妃はうっとりとし流し目を少年へ投げてきた。サビヤも満ち足りた笑みでこれを受けとめた。

だが、その笑みがじきに硬直した。前方から馬蹄の乾わいた響きを蹴立てて二頭の騎馬武者が姿を現したのである。どちらも青衣をまとうていた。大塵仏塔の山麓を巡回してい

る警備兵にちがいない。そこから這い出る者は虫一匹も逃がさぬという備えなのだ。

「お早よう」

少年サビヤは明るく声をかけた。

馬上の兵士はちりり二人を見やった。声は出さなかったが、親しげな笑みを投げて走り去った。他の一騎は振り向こうともしなかった。

「全然、気づいていないわね」

王妃は、少年にしてはややふくらみすぎた胸をおさえかくしていた手をほだいて、安堵の声を洩らした。

「ここまで用意したんですよ。気づかれてたまるもんですか」

少年サビヤは胸をそびやかした。

路傍に流れが現れてきた。牛や山羊に水と馬麦を与えるべく、サビヤは岸辺へ歩み寄った。氷った水面へ棒を突きとおした。

「ここへ降りてきて御覧なさい」

王妃を振り向いた。

「何かありまして」

「何という美しさだ」

氷が割れて、底を流れる透明な水の色。それにもまして氷の割れ目が朝陽に輝いて美しかった。

——清らかな水を観たならば、その映像を明確に記憶しておくために想念を集中するのだ。水を観想し終ったならば水の観想をおこなわねばならない。氷の透明は、青い珠玉を連想させるであらう。そこに青珠の観想が成立する。

「観無量寿経」の水想観が、ここに発想している。氷は青珠を連想させ、その青珠は千種類の光明でかがやき、光りはさまざまな色で躍動し、さらにそこから八種類の清らかな風が吹きおこってくる。その風は、苦や空、無常、無我についての教えを語りかけるのである。

ただし、この朝の少年サビヤは水面の底から冷めたい清水を掬くいとると、横抱きに抱

いた王妃へ口うつしでこれを与えていた。

パミール高原の出口は、やがて巨大な盛り上がりを見せる砂丘へと変貌する。ここから先は天とも地とも見分けのつかぬ大砂漠が連なるのである。

カシユガルの町はこの砂丘上にあった。玄奘の「大唐西域記」が、「沙磧多く、壤土少し。稼穡は殷盛にして、花・菓（なりもの）は繁茂す」と書くように商業の活発な町であった。

ここで牛と山羊を駱駝に交換するつもりだったが、うまく交渉がまとまらなかった。牛や山羊の価値を認めてくれないのである。

「この町で少し働きましようよ」

夕方、サビヤがしょんぼりと家畜宿へ戻ってくる、王妃が明るい声で言った。

町の人は、男はみんなイレズミをしており、いかにも絞るそうである。こんなところで他国者が働けるのであろうか。だが王妃は、絨氈の織り屋へすでに話をつけてきたと

いうのである。

翌朝から二人はその織り屋へ通うようになった。サビヤの眼をみはらせたのは織機と取り組む王妃の手さばきである。熟練の織り姫を思わせた。サビヤはお手上げなので、出来上がった絨氈を市場へ運んで売りさばくのがおもな仕事であった。

一日の仕事を終えて、すでに家畜宿を出た二人は民家の一室を借り受けており、そこへ帰ってくる。楽しい夕餉、歓楽の闇——完全な新婚夫婦である。

でもこれでいいのだろうか。

幸福な毎日が十日十五日とくり返されると少年サビヤは不安になった。少年から女装に戻ってしまった王妃の寝姿を眺めやりながら「明日は駱駝を買いにゆくんだ」と自分に言い聞かせた。

しかし朝がくると、足はまっすぐに織り屋へ向ってしまうのだった。

（つづく）

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年一月二十五日 印刷

昭和六十年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

千二三 振替東京八一八二一八七番

(新)

(刊)

『浄土宗のおつとめ——日常勤行式——』

著者

大正大学教授・文博

真野龍海

B6判 一〇〇頁 定価六五〇円 (〒二五〇円)

〔五十部以上二割引定価五二〇円 〒無料〕

◎平易にかつ丁寧な解説がほどこされた日常勤行式のお話。日々の信仰生活のおつとめに、全二十三節からなるやさしい解説文がお役に立ちます。著者の真摯な人生論としても、また広くおすすめたいい好著です。

(発売) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会

電話 (〇三) 二六二―五九四四

振替 (東京) 八―八二―一八七

第五十一卷

二月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十年一月二十五日印刷 昭和六十年二月一日発行